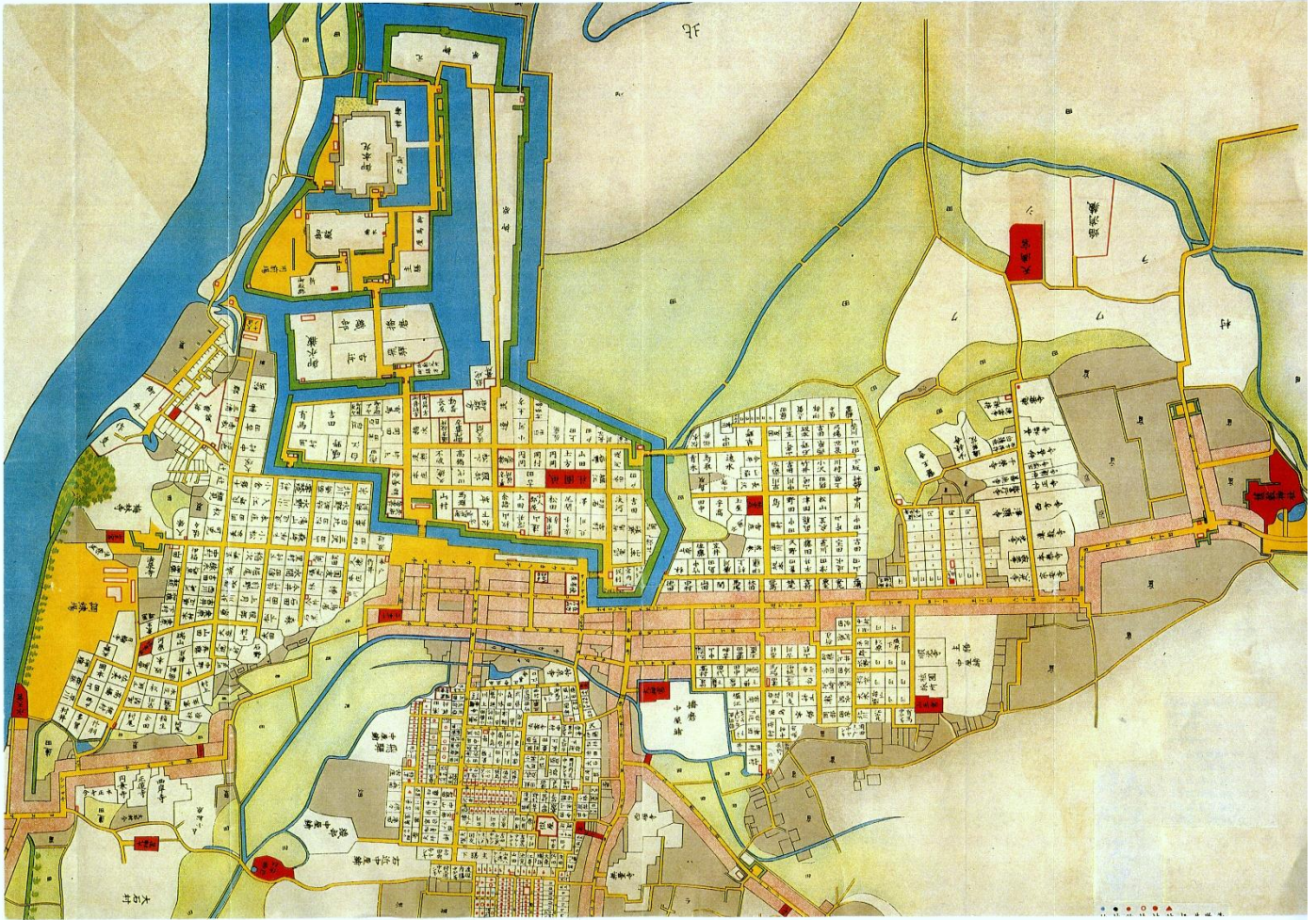


久留米城本丸跡第 5 次発掘調査 現地説明会資料



第 1 図 天保年間（1830-1844 年）の城下絵図

久留米城

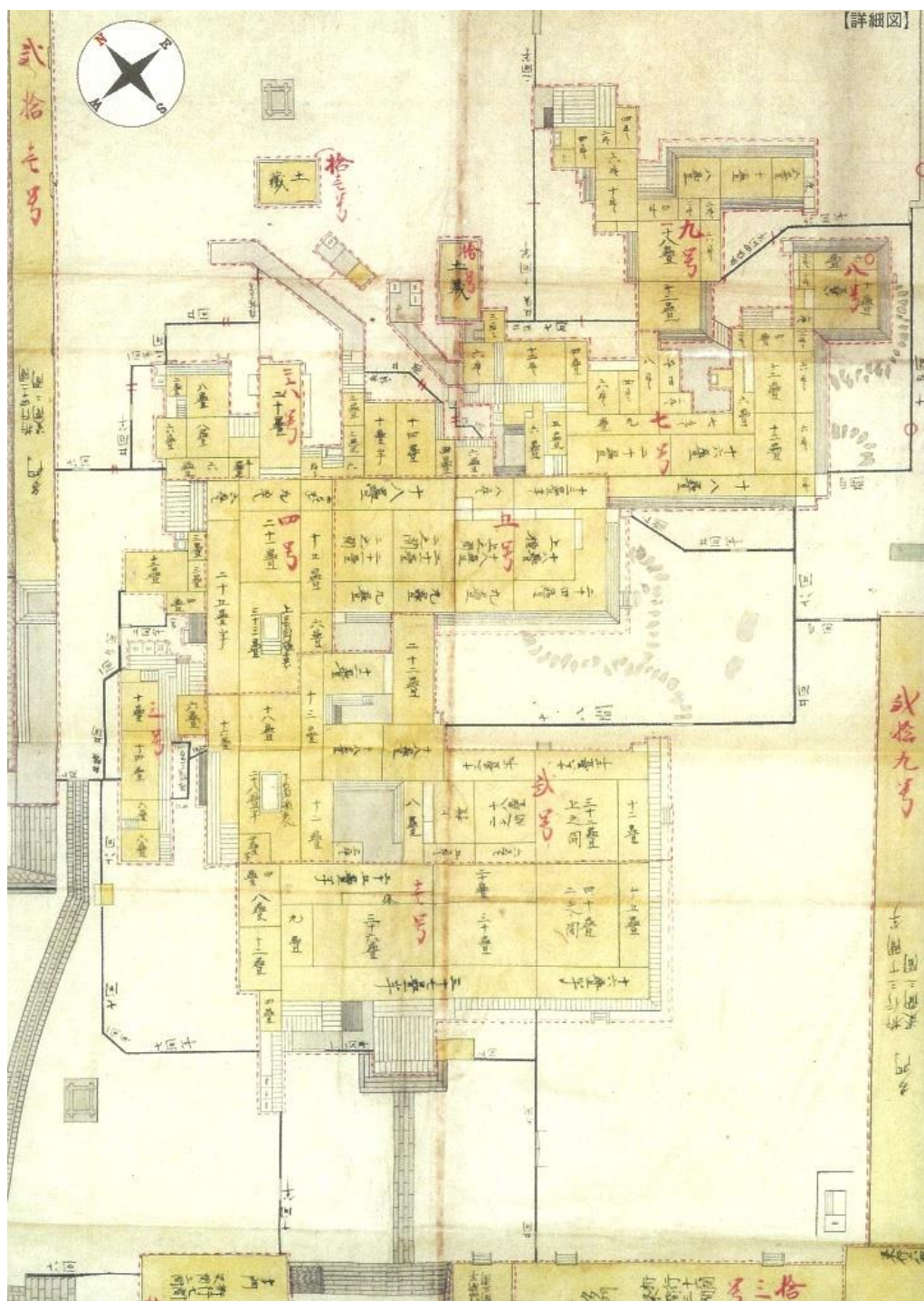
久留米城は久留米市の北西部に位置し、16 世紀前半（永正年間^{えいしょうねんかん}）頃、土豪^{どこう}によって築城されました。その後、数回城主は代わり、元和 7 年（1621）に有馬豊氏^{ありまとようじ}が入城し、数代かけて城郭と城下町を再整備しました。

久留米城は、北から本丸、二ノ丸、三ノ丸、外郭と南北に郭^{くるわ}が連なる連郭式平山城^{れんかくしきひらやまじろ}です。南北約 1.5km、東西約 0.7km（堀を含む）、面積はおよそ 398,561 m²を測ります。その中で本丸は南北約 170m、東西約 102m を占めています。本丸には 7 棟の隅櫓とそれらを連結する多門櫓^{たもんやぐら}が廻り、その中心空間には本丸御殿が建っていました。

久留米城には天守は築造されず、南東隅の^{たつみやぐら}異櫓がその役割を担っていました。そのため、本丸の内部には本丸御殿が建てられていました。本丸御殿は、藩の中心的な建物で、藩の政務や儀式を行う公的な空間（表）であるとともに、藩主やその家族が日常的に暮らす私的な空間（奥）^{おく}でもありました。通常、表は正面に、奥は後方に位置しており、久留米城の本丸御殿も同様の構造であったと考えられます。

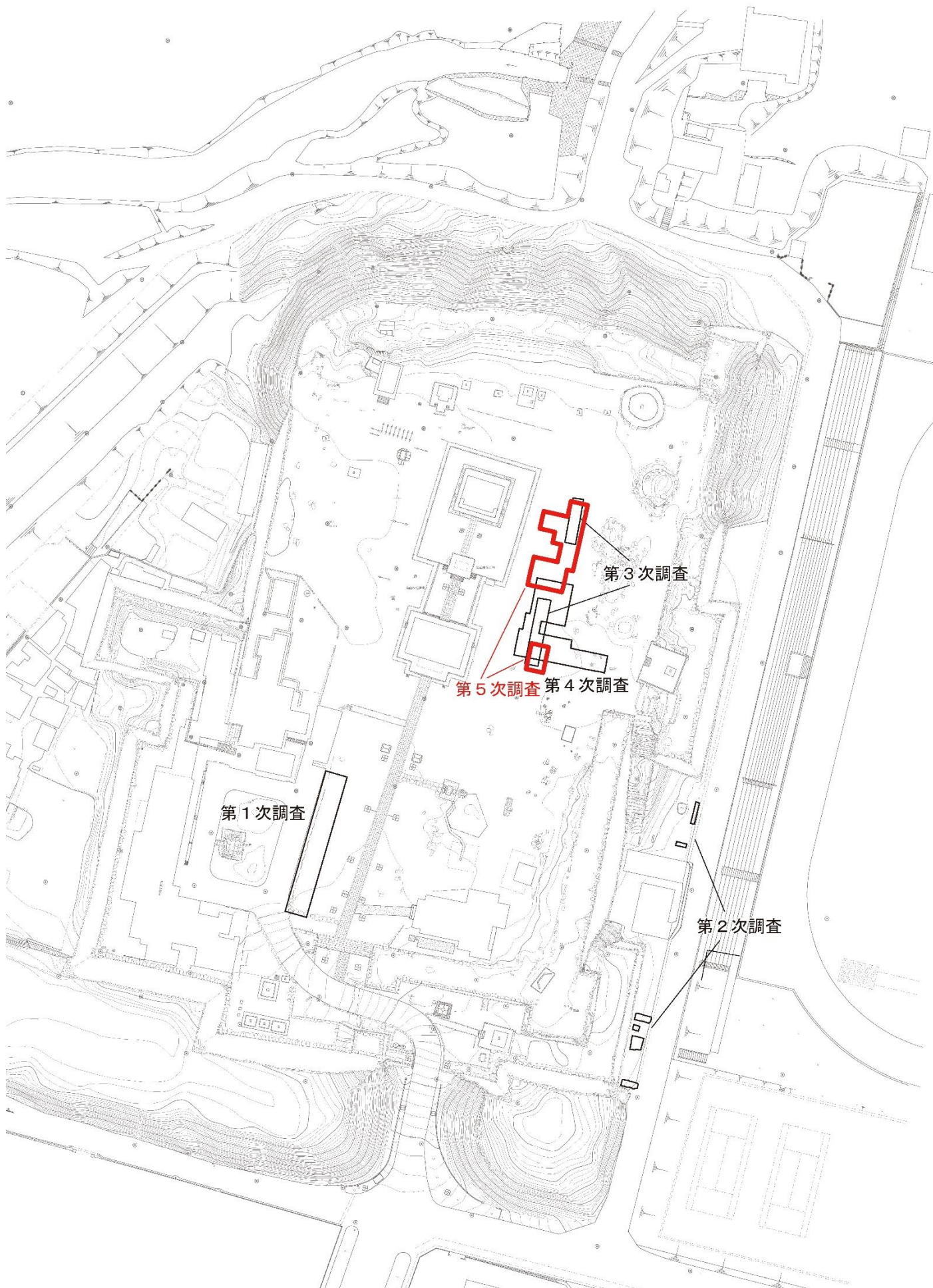
本丸御殿が詳細に描かれた絵図は3葉^{よう}確認されていますが、絵図に描かれた部屋の配置や数等は、一部に差異がみられます。考えられる要因として、測量技術・図面の正確さが異なることや、増築等により本丸御殿の構造が変遷していることが想定されます。

第4次調査（令和7年度実施）と今回の第5次調査（令和8年度実施）では、本丸の北東部に位置する「奥」や「柳の間」「菊の間」を調査しました。調査の結果、建物の基礎等を発見し、本丸御殿の正確な位置が明らかになりました。



第2図 明治4年の本丸御殿（絵図1）

※富原道晴2017「第四章 九州編・その他 110、久留米城福岡県久留米市」
『富原文庫蔵 陸軍省城絵図-明治五年の全国城郭存廃調査記録』戒光祥出版



第3図 久留米城本丸跡発掘調査位置図

第5次調査の目的

令和7年度に実施した第4次調査では本丸御殿の建物基礎が確認され、残された絵図と位置を照合することができました。そこで、今回の調査では、特に遺構の残存状況が良好であった第4次調査地の北側と、用途不明の石組みの溝を検出した南側を拡張し、建物増築の痕跡やその時期等、石組み溝の時期・用途等を明らかにすることを目的として調査を実施しています。

遺構（第4～6図）

そせき

礎石（第4図）

建物の柱の下に据えられていた石。石材の種類や大きさ、形等にバリエーションがみられます。配置は規則的で、礎石間の距離は1.9m～2m程度を測ります。

つかいし

束石（第4図）

床板を支える横木を下から支える床束の下に据えられる石です。礎石の間に、礎石より小さい石が配置されています。

じふくいし

地覆石（第4図）

礎石と礎石の間に一列に並べられた長方形の平石。建物最下部に取りつける横木を上に乗せます。

ねいし

根石（第5図）

礎石を安定させることを目的として、礎石の下に敷かれていた複数の円礫です。円形に土を掘り、礫を敷き詰めたと想定されます。上に据えられていた礎石は失われて確認できません。

石組みの溝（第6図）

両側面を花崗岩や安山岩で組み上げ、直線的に延びる溝。この溝は、第4次調査で確認された溝の延長部にあたると考えられます。用途の詳細、構築された時期については検討中です。



第4図 礎石と束石、地覆石



第5図 根石



第6図 石組みの溝

第 5 次調査

第 4 次調査

第 7 図 久留米城本丸跡第 4・5 次調査 調査区写真

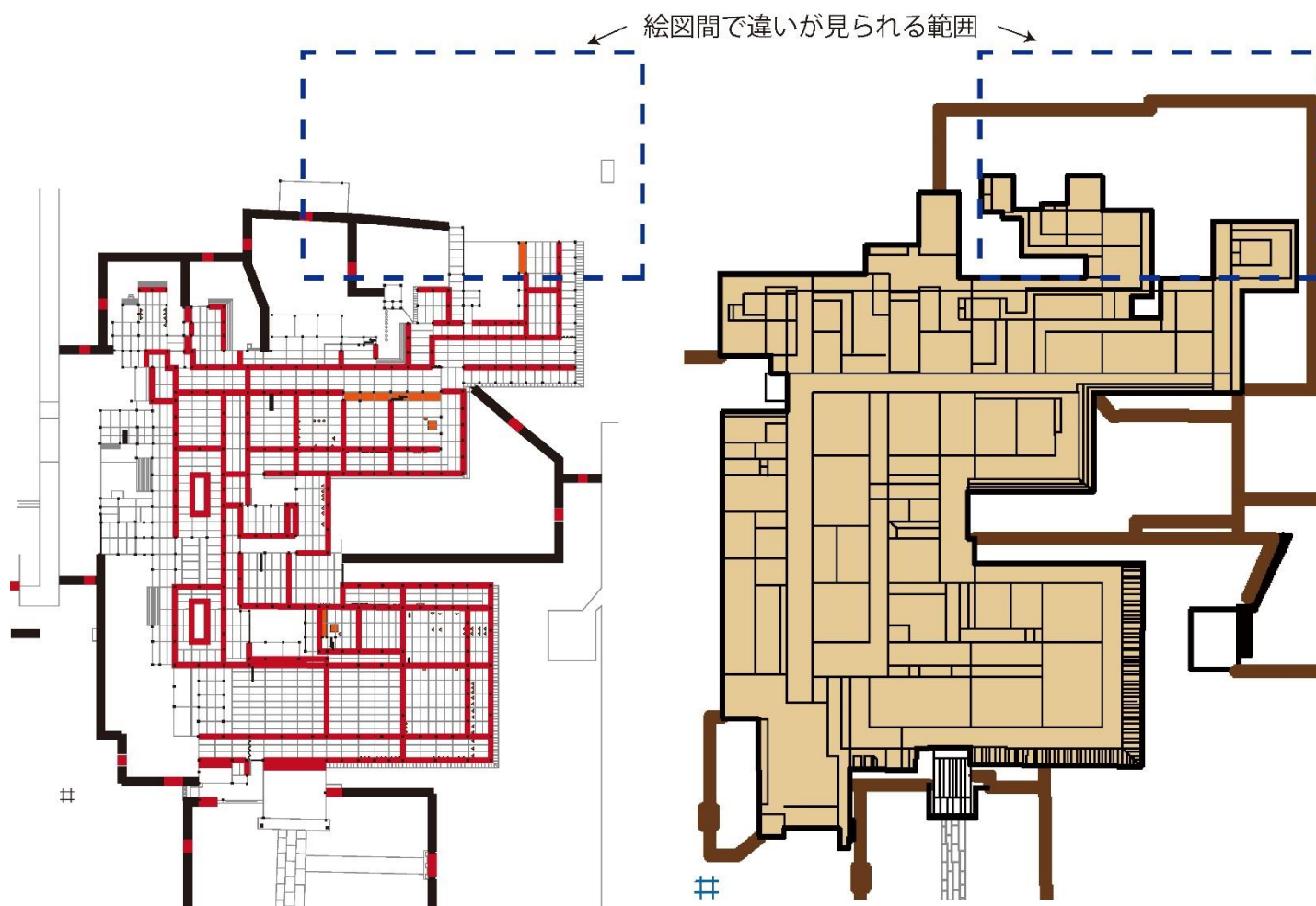
調査成果

溝の構築時期

第4・5次調査で確認された溝は絵図では「菊の間」の位置にあたり、第4次調査で確認された地点で走行方向が変わりますが、第5次調査で確認された溝は南北方向にほぼ直線的に走行します。しかし、調査区2の中ほどで石組みは確認できなくなり、その先はどのように延びるかは不明です。

溝の内部からは多量の瓦が出土しましたが、溝が使用されていた時期を確定できるものではありませんでした。しかし、近代以降の遺物は出土しておらず、周囲よりも多くの瓦が出土していること、溝の南北への走行方向が本丸御殿の軸方向と近いことから、江戸時代の遺構であると考えられます。

また、土層の観察から、石組みは上面の整地と同時に設置されたことが確認されました。そのため、上面の整地を掘り込んでいる柱穴よりも古い遺構であると考えられ、「菊の間」が設置される前に構築されたことが想定されます。



第8図 左：御城本丸絵図（篠山神社所蔵をトレース） 右：御本丸之図（久留米市史第2巻をトレース）

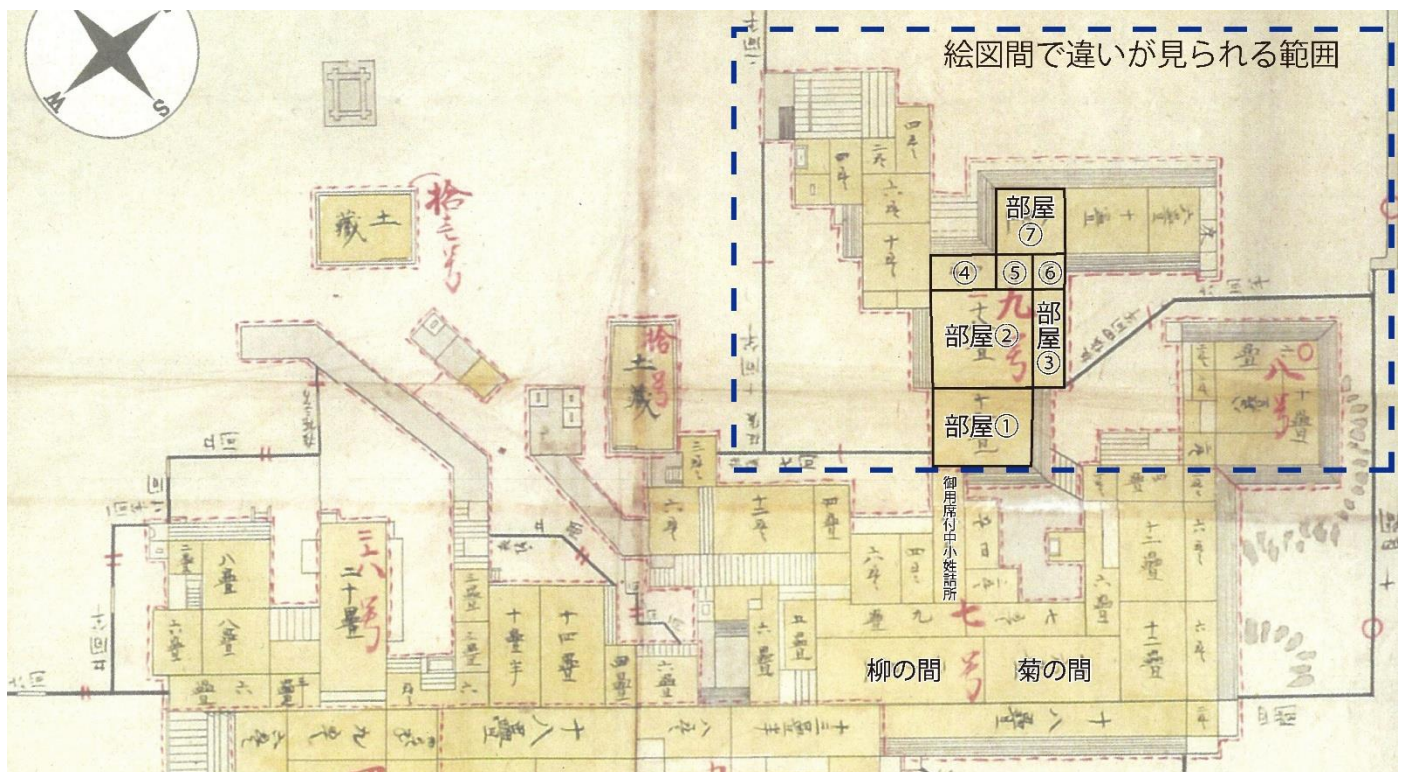
建物基礎の変遷

今回の調査では、時期が特定できる遺物が出土していないことから、建物が建てられた詳細な時期については明らかになっていません。

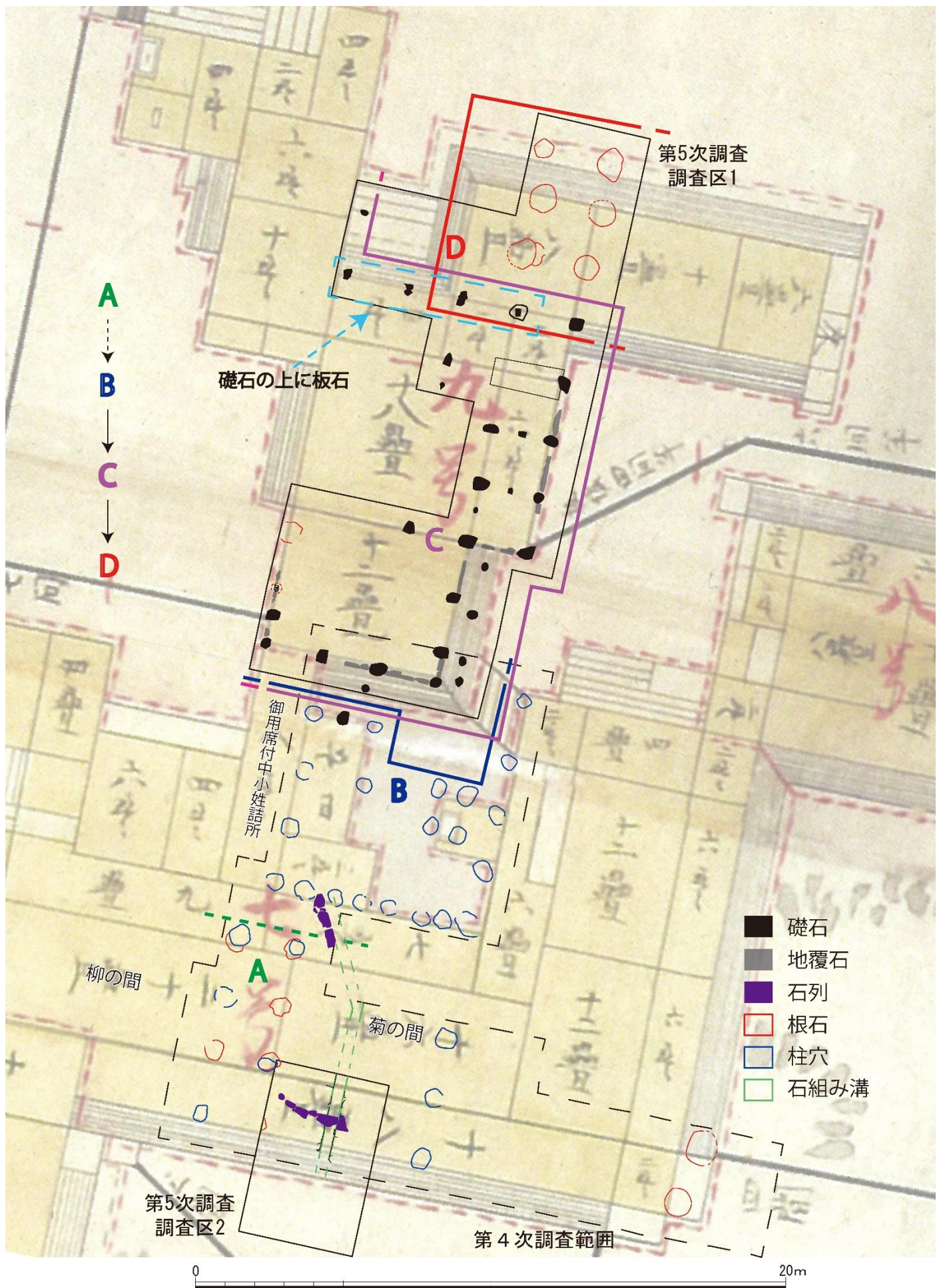
一方で、第4・5次調査の成果から建物基礎には大きく3つのパターン・区画に分けられます。部屋①より南側（A・B 柱穴・根石が主体）、部屋①②③④⑤⑥（C 礎石や地覆石が残存する）、部屋⑦（D 根石のみ）の3区画です。建物基礎の構造の差は施工の時期差の表れと想定されます。これらの範囲は絵図間にみられる差の位置と一致していることから、これらの変遷が増築の過程を示していると考えられます。

なお、部屋②③と⑦の間にある部屋（④⑤⑥）の北辺柱列では礎石の上に揃って板石が載せられており、改修等の施工時に高さを調整した可能性が考えられます。

また、部屋①より南側の区画では根石は限られた箇所でのみ検出されており、根石が確認できる範囲（A）、柱穴のみ確認できる範囲と区別され（B）、一部では根石と柱穴の重複が確認された箇所もあります。これらは、柱を建てた時期に差があることを示していると考えられます。石組み溝の北東延長は本丸御殿の柱穴に突き当たることから、石組み溝はこの柱穴よりも古い時期に構築されたと考えられ、「柳の間」と「菊の間」を境に北側のBの範囲は増築が行われていた可能性がうかがえます。



第9図 絵図1を一部加工



第10図 絵図1と検出された遺構の位置関係